

磐陽新聞

発行元 専力会
福島子愛好
福原研究

祝結婚40周年

山あり谷ありの人生

東京電力が初めて建設・運転した福島第一原発は平成二十三年三月で営業運転開始四十周年を迎える。福島第一原発は福島県の大熊町・双葉町にまたがって位置していることから、東京電力と大熊町・双葉町との付き合いは四十年以上だ。東京電力と自治体の原子力発電所建設当時から現在に至るまでは、まるで男女の結婚生活である。

原発と自治体の結婚

原子力発電所の建設計画が始まった当時、東京電力は原子力発電所の敷地のためにとても広大な土地であり、且つ人

口密度が少なく首都圏から遠くない土地を探していた。一方、大熊町は昭和二十九年の発足以来、農業を産業の中心とする一寒村にすぎず地域活性化を求めている。

家庭内別居の開始

平成十四年八月二十九日原子力安全・保安院及び東京電力が、原子力発電所における自主点検作業に係る不正の事実を公表（二十九件）いわゆる「二九事件」により二人の信頼関係が崩れた。立地四町で組織されている福島県原子力発電所所在町協議会から東京電力にプルサーマル計画の一時凍結の申し入れが提出された。離婚届だ。

家庭内別居の解消

信賴回復の努力から、平成二十一年一月に所在町協議会がプルサーマル計画の凍結を解除し、県議会及び県に対して二人はまた幸せな夫婦生活に戻った。

共生と共進 ～地域とともに～

八、二九事件のときに東京電力は、大熊町の住宅一軒一軒に謝罪に向かったその姿が住民の心を打った。山あり谷ありの彼らの結婚生活は本当に色々なことがあったが、そのひとつひとつに彼らは真剣に向き合ってきたからこそ、現在の東京電力と大熊町の信頼関係がある。そしていま、私たちが彼らに期待することは中国やインドの経済成長により、電気の需要が増え続けている世界に向けて、原子力を発信して世界的に活躍することである。

また、これからも原子力発電所が安全・安心であること、地域と共存・共生していくことを忘れないでほしい。

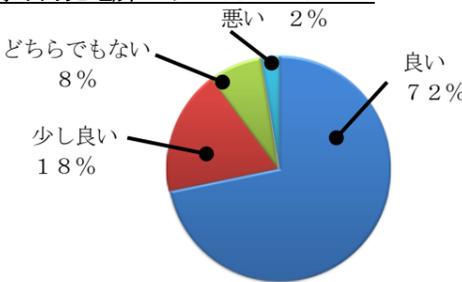
住民の本音が明らかに！

「原発は安全」約6割

今回我々は原子力発電所立地住民である大熊町の町民に対してアンケート調査を行った。回答数は三九人であった。「原子力発電所があっても良かったですか？」という質問に対し、良いという声が過半数を超えた。理由として原子力

ありがとう原発

原子力発電所があっても良かったか？



佐藤久夫さんは平成十年から大熊町二区行政長を務める。大熊町に聞き取り調査をした際に取材に对应して頂いた。佐藤さんからは、福島第一原発の立地している土地の昔の利用状況、当時の地域住民の声など、貴重な話を聞くことができた。話によると、戦時中、現在の福島第一原発のある大熊町二区地区には陸軍の飛行場があった。その後、その場所は広い土地を生かして塩田となったが、その塩田事業も行き詰ると、その土地は再び荒地となつてしまった。塩田がなくなったことで住民は出稼ぎに出ざるを得なくなつてしまつたらしい。その為、原発の誘致を決めた際は地域として東電に発電所の雇用を強く求めた。東電は地域住民の雇用に積極的に取り組んでいくと約束してくれた、と佐藤さんは語った。

あんな人、こんな人

私達は、原子力発電について調べていく過程で色々な発見をしたり、知識を身につけたりすることができた。まず、第一に大阪での研修として原子力についての基礎知識を学んだ。原子力発電の重要性や安全対策への取り組み、現在行われている政策などについて、全国の高校生たちとディベートを行い、自分とは違った意見も参考にして原子力発電についての理解をより深めることができた。

私たちが
見たい未来



次は原子力発電に携わった人たちに聞き取り調査を行ったり、地域住民の声をアンケートとして集計したりすることによって、生の声を聞くことができたことだ。福島県庁。

佐藤さんは一見厳しそうないイメージだったが、話を聞いていくと、とても優しい雰囲気であるという興味深いお話を教えてくれた。立地住民の当時の声や地域の様子の移り変わり、原発がどのように地域住民を助けたかなど、納得し、感心することが多くあった。



大熊町では福島県の原子力発電の歴史と安全対策について、東京電力では、いかに地域住民との信頼関係が大事なのかを教えてくださいました。原子力発電所の歴史としてはいろいろなトラブルが起り、大変だった時期もあったとのこと。そのような自分たちの知らない歴史があったからこそ、今の原子力発電があるのだと知ることができた。

また、わたしたちが思っていた以上に原子力発電所の印象が良い、という地域住民のアンケート結果が出たのは驚きだった。信頼関係が大事なのだ改めて実感した。この学んだ内容をふまえ、わたしたち一人ひとりが原子力発電について理解しようという気持ちが必要なのだと思う。日々必ず使っている電気が、数多くの困難を経て有限の資源から出来ているものだ。もっと多くの人たちに原子力発電のことをたくさん知ってもらいたいと思った。

1960年	5月10日	原子力発電所立地調査で大熊双葉地区が適地であることを確認。戦争時に飛行機の練習場として塩田となつた土地が選ばれた。
1964年	11月27日	土地売買契約が成立し、発電所用地が確保された。
1967年	9月29日	福島第一原発一号機着工。
1971年	3月26日	福島第一原発一号機営業運転開始。
1976年	3月22日	福島県・自治体・東京電力が「原子力発電所周辺地域の安全確保に関する協定」に調印。
1984年	11月30日	福島第一原発が「サイト」としての累計発電量で世界記録を樹立（2億kw）。
1989年	5月25日	一号機連続運転記録樹立。
1999年	9月27日	福島第一原発にMOX燃料が到着。
2001年	3月26日	一号機運転開始から30周年。
2002年	8月29日	自主点検作業記録に係る不正事実が発覚（29件）。
2002年	9月10日	立地四町長（双葉町・大熊町・富岡町・楢葉町）がプルサーマルの実施について「推進」から「一時凍結」で合意。
2009年	1月28日	福島県原子力発電所所在町協議会がプルサーマル計画の凍結を解除。
2009年	2月9日	福島県原子力発電所所在町協議会が県議会及び県に対して、プルサーマル計画議論の再開を要請。
2009年	7月6日	県議会代表者会議でプルサーマル計画を含む原子力行政に関する議論を再開することを決定。
2010年	8月6日	福島第一原発三号機のプルサーマル実施を県が承認。
2010年	8月21日	32体のMOX燃料装荷完了。
2010年	9月23日	福島第一原発三号機プルサーマル発電開始。
2010年	10月26日	福島第一原発三号機プルサーマルによる営業運転を開始。

原子力発電所の新世界、プルサーマルは何？

原子力発電所で使用した後の核燃料（使用済燃料）から取り出したプルトニウムをウランと混合してMOX燃料（再処理で得られた酸化プルトニウムと酸化ウランを混ぜ合わせて作った燃料）に加

工し、原子力発電所（軽水炉）で利用することをプルサーマルという。プルサーマルという言葉は、プルトニウムを軽水炉（サーマルリアクター）で利用するという意味の日本語独自の造語である。福島県は、プルサーマル実施に関して3つの技術的条件を提示した。福島第一原発三号機の耐震安全性の確認、高経年化対策の確認、搬入後十年を経過したMOX燃料の健全性の確認、これら三条件について東電はMOX燃料の点検・評価

プルサーマルは安全

今回の取材や調査を経てプルサーマルは安全で二酸化炭素を排出せず、しかもこれからのエネルギー社会に大きな役割を担う発電方法だと知った。プルサーマルやMOX燃料の知識がないから、

三研発表会での発表

福島高専の前期授業科目に、二年生が一人の先生に三〇五人程度配属されて与えられたテーマについて研究する「三研」がある。卒業研究の縮小版のようなものである。二年生は前期授業・夏休みの間に研究活動を行い、得られた結果をポスターにまとめ、先生や友達、一般市民に発表を行う。本校の体育館で発表会が行われ、私たちは聞き取り調査の結果について報告した。ポスター形式での発表であつた

が、様々な意見を得ることができた。質問された内容はほとんどが原子力発電の仕組みについてであり、原子力発電について詳しい内容を知っている人は少ないと感じた。質問に対してある程度は答えることが出来たが、自分たちで理解していると思つていてもまだまだ勉強不足であると感じた。この発表によって各自が資料を読み返して更に理解を深めることが出来たので、自分たちにとつてためになる中間発表であつた。

【福島高専原子力研究愛好会】